もう一つの透谷
―その可能性と限界―

槇林　滉二

序

これまで北村透谷の討究は、多く「透谷とは何であるのか、何であったのか」に終始してきた。それに対して、「透谷とは、他の何かでありうることはできなかったか、他の何かでありえた可能性は無かったか」という問いも存在もしうるのではないだろうか。そして、それは取りも直さず透谷が何故自殺したのかという問いに連動する。何故死んだのかという問いは他に生きる道は無かったのかということにも連なるが故である。

ある種の完成とともに、大きな未完成の中にその短い一生を走りきったと思われる透谷に関して、完成を基軸とするとそれ故にもつ限界について、未完を基軸とするとそれ故に考えられる可能性について、少し考察してみたいと思うのが、本稿の意とするところである。

明治初・中期に一つ隆盛の時代を築いた少年投稿雑誌『頴才新誌』を読んでいて、ふと明治二十四年に集中する「東京府　T．K．」なる若者の、四つの投稿論に出会った。明治二十四年といえば、透谷にとって、同年五月の「蓬莱曲」、十一月の「二宮尊徳翁」以外作品の発表のない一種の空白期であり、透谷の筆になるかと少し気にかかったが、当時の日記（「透谷子漫録摘集」）などと比べると、このT．K．氏の投稿論は文体的にいかにも未熟で透谷である可能性は乏しい。もし、もう十年前の透谷であればと心残りであった。

だがしかし、その内容はきわめて透谷内質に近く、透谷の空白、あるいは透谷全体にかかわる可能性を示すようなところもあり、これから逆に、透谷の今一つの可能性を引き出せるのではないかと思われ、ここに提示してみる。

一、

四つの投稿論と記した。その第一が、次の「都ノ少年」である。

繁昌ナルハ都会ナリ、便利ナルハ都会ナリ、人口稠密ナルハ都会ナリ、富者多キハ都会ナリ、然レトモ貧者多キモ亦都会ナリ、悪徒遊冶郎多キモ亦都会ナリ、腐敗ノ空気滔々充満セルモ亦都会ナリ、換言スレハ、都会ハ善悪最極ノ羅織場ナリ、而シテ悪ニ入ルハ易ク、善ニ入ルハ難シ、故ニ都ノ少年ハ動モスレハ放蕩ノ奴隷トナリ、怠惰ノ魁首トナリ、軽薄ノ堕落者トナル、是レ古来大英

雄、大文豪、大商人ノ都会ニ生レサル所以ナリ、思フニ、都会ニ生レタル少年ハ、人生ノ最大不幸者ナルヘシ、ベンガル人民ノ、比馬拉亜山麓ノ人民ニ於ルカ如ク、楊子江畔人民ノ、満州、蒙古ノ人民ニ於ルカ如ク、優勝劣敗ノ生存競争場裡ニ於テ、都ノ少年ハ常ニ地方少年ニ圧倒セラルルヲ免レス、而シテ学校モ其弁護人ナリ、社会ノ歴史モ其保証者ナリ、蓋シ都会ノ少年ハ、四面虚飾ノ内ニアリ、詐謟ノ窩中ニアリ、満街紅塵万丈ノ内ニアリ、花柳ノ臭気紛々トシテ、淫風盈々ノ猥霧中ニアリ、金力即チ権力ノ陰険線中ニアリ、人間天真爛漫ノ美発スルニ暇ナク、忍耐、勤勉、敦厚ノ徳風去リ、地方少年質朴、勤勉ノ烽火ニ驚カサレテ、甲冑ヲ着シ、槍剣ヲ振フモ、柔弱ノ身体、健康ノ精神ヲ宿スニ由ナク、連戦連敗、空シク幽谷ノ芳蘭ニ樹園ノ全権ヲ掌握セシムルニ至ル、豈ニ慨嘆セサルヘケンヤ、嗚呼都会少年ノ睡眠ヲ警醒スル、果シテ如何セハ可ナル乎、予ニ三策アリ、一ニ曰ク、地方旅行ヲ試ミヨ、二ニ曰ク、地方旅行ヲ試ミヨ、三ニ曰ク、地方旅行ヲ試ミヨ、

（明24・1・17『穎才新誌』第七百三号）

T．K．氏は、都会の「繁昌」「便利」を述べつつも、そこを「善悪最極ノ羅織場」ととらえ、そこで「都ノ少年」が、「放蕩ノ奴隷」となり、「怠惰ノ魁首」となり、「軽薄ノ堕落者」となることを憂え、そこからは「大英雄、大文豪、大商人」は生まれないとして、「都会」の醜悪を慨嘆、その解決法として、「予ニ三策アリ、一ニ曰ク、地方旅行ヲ試ミヨ、二ニ曰ク、地方旅行ヲ試ミヨ、三ニ曰ク、地方旅行ヲ試ミヨ、」と声高く提唱している。

透谷は少年時、旅行を好み各地をさすらい、「トラヴェラー」というあだ名があったことが伝えられている。

この年生は各地に旅行し風景の賞味家となれり、又た種々の人間に交際して人情の研究家となれり、

（「石坂ミナ宛書簡草稿」明20・8・18）

「余が東京専門学校にありし時、人あり余に告げて曰く、塾に北村門太郎と云ふ人あり、此人頗る漫遊を好み、一旦飄然として出れば、五六十日は帰り来らず、蓋し一奇人なりと」（宮崎湖処子「透谷庵を憶ふ」・一八九四年六月五日「国民新聞」所載）。透谷がトラヴェラーというあだ名をつけられたのは、この頃であった。

（勝本清一郎『透谷全集第三巻』「年譜」昭30・9　岩波書店）

これから二つのことが、言えそうである。一つはまさにこの投稿論は旅行を好んだ透谷の提言として当をえているということである。そして今一つは「富士山遊びの記憶」（明18稿）、「三日幻境」（明25・8～9）などに、その才覚を表すも、透谷自身、その後、旅行に乏しかったことで、これはその自己に対する忠告ともなり、またその後半生の予兆や予告となっているかもしれないということである。透谷晩年もし、今少し広い旅行や視野があればと思われ、その提言は時代に対するとともに透谷自身に強くかかわるようなものであったかもしれないと思うのである。

二、

投稿論の第二は、「弾劾戦争文」なる一文である。これは、より透谷内意に近い論である。少し長いがこれもさきに全文引いてみる。

嗚呼戦争ヨ、汝ハソモ奈何ナル魔神ソヤ、古来汝ノ為メニ命ヲ殞シ、生ヲ失ヒシ者、幾何ソ、虎ノ如キ勇士モ、奇計湧クカ如キノ智者モ、汝ノ為メニハ、皆悲惨ノ墓場ニ葬ラレヌ、嗚呼戦争ヨ、汝ハソモ奈何ナル怨鬼ソヤ、縦横六大州、上下五千載、汝ノ為メニ蒙リタル億兆蒼生ノ害悪ハ、幾何ソ、砲声天ニ轟ケハ、血河滾々トシテ流レ、剣戟一トタヒ交ハレハ、屍山忽チ現ハル、嗚呼戦争ヨ、汝ハソモ奈何ナル暴君ソヤ、人生汝ノ為メニ幸福安寧ヲ妨害セラレタルコト、幾何ソ、星ヲ踏テ出テ、月ヲ戴テ還リ、額ニ汗シテ得タル黄金モ、掌中ノ玉、頭上ノ珊瑚ト称セラレタル壮年ノ愛子モ、汝ノ為メニハ皆空茫ノ犠牲トナリ終リヌ、嗚呼戦争ヨ、汝ハソモ奈何ナル開花ノ塗泥者ソヤ、汝ノ為メニ恨ヲ呑ミ、怨ヲ含ミ、地下ニ眠ル発明家、発見家、幾人ソ、無限ノ富庫大塊ニ影ヲ映セハ、汝ハ忽チ是ニ紅血ヲ流シ、理化学ノ発達其烽火ヲ挙クレハ、汝ハ直チニ之ヲ捉ヘテ、多ク人ヲ屠ル、嗚呼戦争ヨ、汝ハソモ奈何ナル文明ノ不平者ソヤ、古来汝ノ為メニ救世済民ノ宗教家カ、風ニ哭シ、雨ニ咽ヒシコト、幾回ソ、仁慈ノ恩光モ、汝来レハ腥々タル紅雨ト化シ去リ、万巻ノ経典モ、汝ノ暴虐ヲ制スル能ハス、汝世ニ在ルコト、愈々長ケレハ、蓬莱時代（ユトピアン、エージ）来ルコト、愈々遠シ、嗚呼戦争ヨ、汝ハソモ奈何ナル不正ノ大法官ソヤ、汝ノ為メニ邪者勝チ、正者敗レ、獰猛吼ヘ、弱羊斃レシコト、幾何ソ、時トシテ汝ハ自由ノ忠僕トナリ、正義ノ天使トナレリ、然レトモ汝ノ大手ハ、常ニ弱肉強肉ノ理義ヲ、不吉ナル無名ノ深霧中ニ実演セリ、嗚呼戦争ヨ、汝ハソモ奈何ナル造化ノ反逆人ソヤ、宇宙ノ大観、汝ノ為メニ不幸ヲ蒙リタルコト、幾何ソ、百万ノ人口ヲ保テル大都モ、汝ノ為ニハ忽チ一条ノ黒烟ト化シ去リ、天高ク気清ク、音ナク、風ナキ、静カナル広野モ、汝ノ為メニハ蕭々トシテ悲風嘯キ、鬼火湿々トシテ微カニ、人世ノ無常ヲ吊フノ修羅場ト変シヌ、嗚呼魔神ヨ、怨鬼ヨ、暴君ヨ、汝ハ人間至大ノ幸福ヲ購フノ権力ヲ有スルヤ、嗚呼造化ノ反逆者ヨ、不正ノ大法官ヨ、汝ハ斯民ヲシテ安眠ノ床台ニ就カシメ、将タ悠々楽園ニ徜徉セシムルヲ得ルヤ、嗚呼開化ノ塗泥者ヨ、文明ノ不平者ヨ、汝ハ社会進歩ノ潮流ヲ濁ラシ、仁愛ノ天日ヲ蔽ヒ、残忍ノ先駆トナリテ、而シテ中心尚欣々タル乎、嗚呼弾丸ヨ、槍剣ヨ、汝ハ霧ノ如ク飛ヒ、電光ノ如ク閃メキ、人ノ頭脳ヲ貫キ、人ノ肢体ヲ粉末ニシ、而シテ汝ノ天職ヲ尽セリト思フ乎、嗚呼紅雪ヨ、血雨ヨ、汝ハ崔鬼タル山頂ニ降リ、洋々タル大江ヲ染メ、而シテ絶世ノ画工（ペインター）ナリト矜ル乎、嗚呼戦争ヨ、干戈ヨ、汝ハ生霊ノ白骨ヲ見サレハ満足セサル乎、汝ハ瘡痍ニ苦シム兵士ノ声ヲ聞カサレハ、怡々タラサル乎、抑亦汝ハ世界ノ人民ヲ挙ケテ、悉ク赤色ノ水波ニ漂ハシメサレハ、以テ莞爾タラサル乎、嗚呼自由ノ戦争、誰カ之ヲ拒マン、正義ノ戦争、誰カ是ニ抗セン、然レトモ是レ尚圧制者、不正者ノ呼ヒ起シタル不吉ノ戦争ニ非ラスシテ何ソ、況ヤ戦争ノ為

メノ戦争ニ於テオヤ、虚名ヲ得ン為メノ戦争ニ於テオヤ、無名ノ戦争ニ於テオヤ、其結果唯ニアルノミ、一ニ曰ク不幸、二ニ曰ク皆無、嗚呼、六花繽紛タル北極ノ天ヨリ、緑葉鬱乎タル熱帯ノ空ニ至ル迄、腥風ノ嘯カサリシ所、幾所カアル、浪静カナル珊瑚礁畔ヨリ、皚々タル氷山ノ近傍ニ至ル迄、血痕ノ点セサリシ所、幾所カアル、試ニ予ヲシテ戦争ノ弾劾者タラシメヨ、予ハ世界万民ノ名ヲ以テ、戦争ヲ弾劾ス、彼レ人世ノ幸福ト平和ヲ蹂躙セリ、予ハ文明ト開化ニ代テ、戦争ヲ弾劾ス、彼レ暴君ヲ助テ正人ヲ苦シメ、仁愛ノ彩虹ヲ消散シテ、残忍ノ烽火ヲ挙ケリ、而シテ予ハ最後ニ宗教家ノ名ヲ以テ、理財家ノ名ヲ以テ、教育家ノ名ヲ以テ、男女両性ノ名ヲ以テ、老幼両者ノ名ヲ以テ、此有害無益ナル戦争ヲ弾劾ス、嗚呼戦争、尚逝カスンハ、十九世紀ノ文明社会モ、尚太古ノ野蛮社会ノミ、予亦何ヲカ云ハン、

（明24・1・31『穎才新誌』第七百五号）

「嗚呼」の連続により、戦争を「魔神」「暴君」「開化ノ塗泥者」「文明ノ不平者」として告発、ために「蓬莱時代来ルコト、愈々遠シ」と嘆き、ために「百万ノ人口ヲ保テル大都」も「一条ノ黒烟」と化すと記す。更には、「自由ノ戦争」や「正義ノ戦争」と言うも、これは「圧制者、不正者ノ呼ヒ起シタル不吉ノ戦争ニ非ラスシテ何ソ」とそれらを拒否、戦争全般を「宗教家ノ名ヲ以テ、理財家ノ名ヲ以テ、教育家ノ名ヲ以テ、男女両性ノ名ヲ以テ、老幼両者ノ名ヲ以テ、此有害無益ナル戦争ヲ弾劾ス、」と高唱している。

透谷は、早くに、明治二十二年、日本平和会創立にかかわり、この明治二十四年頃にはその活動に積極的に参加、二十五年には、機関誌『平和』の主筆になっている。しかし、その時々の具体的な行動や論調は今一つはっきりしない。『平和』収載論稿も具体的な内実に乏しい。T.K.氏のような生彩ある戦争批判に欠けるところがある。『平和』に載せた透谷の戦争批判を引けば、次のようである。

戦争に対する偉人の理想

は、労苦を以て敢て喪敗せざるなり。高潔崇高なる詩人哲学者は悉く、戦争の邪念を悪む、而して英雄中の英雄なる基督に至りては堅く万民の相戦ふを禁じたり。凡て人を詛ふの念を誡しめ、己れを詛ふ者を愛するをもて天国の極意とせり。是れを、極めて簡にして而して極めて大なる理想と言はざらめや。人若し我が右の頬をうたば、左の頬をも向けてうたしめよとは、豈天地を円うする最大秘訣にあらずや。

（「想断々（1）」明25・3）

闘犬

戦ひに死して背を敵に向けず、其勇は実に嘉すべし。然れども戦ふ為に産れ、戦ふ為に仆る可きは、夫れ仏国か。一大魔ありて人間界を支配するとせば、彼は仏国を以て一闘犬となしつゝあるなり。何となれば仏人は国利の為に戦ふよりも、寧ろ戦ひの為に戦ふ。平和、平和、遂に爾を煩はさざるを得ず。

（「想断々（2）」明25・3）

前述のトラヴェラーと同じく、この投稿論も右のような『平和』収載の論調に比べるとより具体的で激しく、もし、もっとファナテックにこれらの方向に透谷の目が向けられていたら、今一人の平和運動家透谷が存していたかも知れないといった可能性を示すものでもある。

三、

そして、T．K．氏第三回目の投稿論は、「村落の鉄匠（訳西詩）」と題された次のような西洋詩の翻訳の試みである。

栗樹繁茂し、枝葉蔚然、村落の鉄匠、栗樹の下に佇立す、鉄匠元と大力の人、手大に亦剛、剛腕の節肉、鉄板より強し、
縮髪、色濃く長く垂れ、顔黄褐、櫟皮末（かしわのかわのこな）の如し、額は流汗湿々、是れ誠実の流汗、不義の利得、豈に収め取る事をなさんや、未だ負はす、漂母の一餐、憚からす、畏れす、悠々望見す、全世界、週日来り、週日去り、朝来り、夜迎ふ、風櫃（ふるがう）の音は間絶せす、重槌の響き、豈に止むの時あらんや、打撃斉又緩、疑らくは、是れ寺僕落陽に叩く村落の鐘声、
残し来る学校の門、還り来る我が家、開戸の外より内を眺め見るは、是れ児童、児童見る事を愛す、赤熾せる鍛鉄場、又聞く事を好む、風櫃の吼声、更に喜ぶ、飛散せる炎花を捕ふる事を、
炎花繽紛、糠紛の落架（すれつしんくふらわー）より飛落するか如し、
安息日には寺院に詣つ、席は其児の中にあり、僧侶祈祷し、又教を説く、村落の唱歌、歌ふ娘の声、聞て悦ふ鉄匠か心、
娘の歌声極楽浄土、母の歌声、豈に尚一次母を思はさるを得んや、母は安臥す、塋亢の内、知らす、状奈何、剛粗の手拭ひ去る両眼涙の雫、
労苦又歓楽、歓楽又悲哀、日を送り、日を迎ふ、鉄匠か生涯、毎朝某工を始め、毎夕某工を終る、某事を試み、某事を為し、儲け得たり一夜の快眠、鉄匠是れ尊友、教誨豈に多謝せさるを得んや、人生亦赤熾せる鍛鉄場、利運の製作是れに異るへからす、炎々たる行為思想、総て是れ何に依て形ち付けなん、鉄匠師とすへし、鉄砧の上、鉄砧撃ては声あり、鏗爾としてなる、

（明24・6・6『穎才新誌』第七百二十三号）

この前年の明治二十三年十一月、透谷は普連土女学校に英語教師として奉職している。そこで透谷が何を教えたか。私にとって、何より奇妙に思えるのは、東京専門学校政治科や英語科に数年学んだだけの透谷にどの位の学力があったのかということである。前記の勝本年譜は、早くに、明治十六年英語修行のため横浜のホテルにボーイとして雇われ、外国人に叱られたことを伝えている。またのち、ハムレットの解釈について、斎藤冬に異論を出され「成程さう解釈しても面白い、さういふやうに人々の考でいろいろ解釈し得られる所が沙翁の偉い所です。」（星野まん「ハムレットの講義」昭9・4『明治文学研究』）といった奇妙な問答があったことも伝えられている。『平和』に、トルストイの「戦争と平和」の訳載を何度か予告しているが、しかし結局、果たし得なかったようである。

また、興味深いのは、小説「宿魂鏡」（明26・1）の中で、主人公の芳三が、次のように、お弓に「ロングフエローの詩」の訳読を課していることである。

ハヽそんな口を、どこから、学校から覚えて来てか、華族女学校には悪い教師が居ると見える、それよりは昨日のロングフエローの詩は何うなされし、能く解かりましたか。イエ解りませぬ、解からぬ事は矢張り解りませぬ。また其んな事を、夫人は何方へか御出掛なされたか。例の亀野様と、あの舞踏会へ。

そして、まさしく、この「村落の鉄匠」は、ロングフエローの詩であり、いかにも稚拙な、しかし、朴訥な翻訳の試みである。

そのことは、翌々年、宮崎湖処子の『湖処子詩集』（明26・11）中に同じ詩が、次のように見事に訳載されているので、それと比べると、この試みが、ただなる試みとしての位置しか持っていないことを証明している。『小学唱歌集』（明14・11～17・3）における「村の鍛冶屋」などもこういった流れの早いものであろうか。

里　鍛　冶　　ロングフヘロー原作

影いとひろき栗の樹の／下に里の鍛冶廬の立ちにけり。／鍛冶の男はたけたかく／骨たくましく手も肥えてつ、／つよき腕はくろがねの／索も綯ふべく見えにけり。

髪はかしらに結ぼほれ、／面はあかくなりにけり。／とるいとなみの間をなみ／ひたひの汗のひるまなし。／さばれ世に負ふ所なみ／ひろきはかれが肩身なり。

日日のあけくれ一週、／たゝらの風の絶間なし。／鉄砧たゝく槌おとも／自づからなる調にて、／夕日うすづく山寺の／鐘のこゑにも似たりけり。

学びの庭より帰る子は／鍛冶する窓にむらがりて／もゆる囲炉裏やおもしろき／たゝらの音を見つきゝつ、／瞬く間ごと花とちる／火花ひろひて遊ぶなり。

安息日来ればわが子等を／つれてみ寺にまふでては、／ひじりの祈神のみち、／わけても鄙のしらべにて／歌ふわが娘のあはれなる／歌をきくなりうれしげに。

天津国にて亡き母の／歌ふ声聞くこゝちして、／わが娘が歌ふ度ごとに／むかしのことを思ひいで、／鉄もひしがむ其手もて／涙ふくなり人しれず。

喜び、悲み、営みの／めぐる車の世を世にて、／事なし初ぬ朝な朝な、／事なしはてぬ夕な夕な、／思ひたちまち遂げぬれば／夜々のやすみものどかなり。

其鍛冶男朝な夕な、／めでたき教を教ふなり。／わが運命も世の中の／囲炉裏にとけて、鉄しきに／きたはれてこそ、世をてらす／業と言葉になりもすれ。

透谷の英語力がどれくらいであったか、くわしくは解かりかねるが、こういった翻訳を行うことも、「戦争と平和」翻訳予告などを思い起こすと、今一人の透谷、翻訳家としての透谷の可能性を示していると言ってよいかもしれない。

四、

そして、投稿論第四は「人生」。これが、T．K．氏の最後の論である。これも先に全文引いてみる。

人間母ノ胎内ヲ出テヽ五十年、夢乎幻乎、一ハ生、二ハ死、始ハ揺籃、終ハ墳墓、少壮老ノ三時代、其間ニ点綴シ、星霜之ヲ装飾シ、紅顔白髪外テ表シ、冀望、作業、悔悟内ニ動キ、忽焉トシテ渾円球上ニ来リ、忽焉トシテ渾円球下ニ逝ク、人生ノ無常、何ソ一ニ茲ニ至ル、碧蹄大塊ヲ蹂躙スルノ英雄モ、鬼神ヲ泣カシムルノ詩人モ、月卿雲客ノ貴人モ、山渓ノ樵夫、沙上ノ漁夫モ、等シク皆人生ノ標題ノ下ニハ泣キヌ、嗚呼人世是レ何者ソ、然レトモ、人間決シテ人生ノ果敢ナキヲ嘆スル勿レ、生ハ自然ノ負債ナリ、死ハ自然ノ負債ヲ償却スルナリ、生モ命ナリ、死モ天ナリ、生死ハ人間ノ波瀾ナリ、文章ナリ、生アレハ、茲ニ死アリ、死アレハ、茲ニ生アリ、油然タル北極ノ雲モ、沛然タル南溟ノ雨トナリ、煌々タル天漢ノ明星モ、時来レハ光ヲ失フ、況ヤ眇乎タル滄海ノ一粟、豈生アリテ茲ニ死ナキヲ得ンヤ、死生ハ人間喜憂ノ係ル所ニアラス、人間ノ方ニ務ムヘキハ、死生外ニ於テ、人間ノ職分ヲ表スニアリ、蓋シ人ハ星霜呼吸ニ生活スルニアラスシテ、行為思想ニ生活スルナリ、真正ノ長寿者トハ、其ノ年令ノ多少ニアラスシテ、其人ノ言行ノ良否如何ニアリ、憂フル所ハ光陰経過ノ速カナルニアラス、悲シム所ハ事業ノ成ラサルニアリ、夫レ光陰ハ銀滴ナリ、金雨ナリ、苟クモ光陰ヲ空過セス、事業ヲ成シ了ラハ、縦令身ハ夭折シテ、北邙一片ノ烟リト消ヘ去ルモ、芳名ハ長ヘニ後世ニ存スヘシ、若シ夫レ李白ヲ挙テ、人生ハ夢ナリト諦ラメ、日々酒ニ酔テ泥ノ如クンハ、是レ人生ノ如何ヲ知ラサル者ナリ、彼ノ昆虫ヲ見スヤ、其生命ノ果敢ナキ事、風前ノ燈火モ啻ナラス、朝生夕死、豈ニ人生五十年ノ比ナランヤ、而モ尚薄紅東海ノ天ヲ染ムル暁ヨリ、暗黒空ヲ洗フノタニ至ル迄、西ニ飛ヒ、東ニ舞ヒ、孳々汲々トシテ労苦ス、況ヤ人間万物ノ霊長タルノ身ヲ以テ、自ラ勉メスシテ徒ニ白駒ノ過キ易キヲ恨ミ、無事ナル人生ニ罪ヲ負ハシメテ、何事モ為スナク、唯碌々トシテ光陰ヲ消過シテ可ナランヤ、春花ト共ニ来リ、春花ニ先チテ凋零スルヲ見レハ、人ハ皆曰ク、花何ソ無功短命ナルノ甚シキヤト、而シテ自ラ遠ク花ニ如カサル者アルヲ知ラサルナリ、夫レ散ルノ花ハ、雌雄両蕊ノ調合中ヲ得テ、準備全ク成リ、功成リ名遂テ、後散ルノ花ナリ、豈ニ其ノ短命ナルヲ問ンヤ、嗚呼人生ハ絶望ノ人生ニアラサルナリ、悲哀ノ人生ニアラサルナリ、悲哀絶望、人自ラ招クノミ、欽羨ス、

大英雄、大文豪、其ノ身ハ早ク朽ルモ、其魂ハ大塊ヲ呑ミ、北斗ヲ突キ、幾千載ノ後、天下ヲシテ尚其人ヲ忘レサラシム、想像ス、曠茫タル渾円球上、人幾億万、絶望悲哀ノ惨境ニ沈淪シテ、自暴自棄、草木ト共ニ朽腐シ去ル者幾人ソ、言ヲ寄ス、人間晏然康然、徒ニ眼前ノ行楽ニ耽リ、大名ヲ後世ニ残留スルヲ知ラス、山水風月ニ沈溺シ、悠々閑々、日月ヲ迎ヘ、星霜ヲ送リ、卓然昂然、世俗ニ超絶スル事ヲ勉メス、唯生レ、唯死シ、唯食ヒ、唯寐テ、行路ニ怒濤高瀾ナク、言ニ金石ノ語ナク、行ニ大義大勇大智ノ高節ナク、人間ノ実ナクシテ、人間ノ名アル者ハ、実ニ是レ昆虫落花ニ劣ルノミナラス、抑亦人生ノ賊ナリ、ロングフエロー氏曰ク、人世ハ確実ナリ夢ニアラスト、豈ニ千古ノ格言ニアラスヤ、噫嘻、

（明24・6・27『穎才新誌』第七百二十六号）

「人生」五十年、「唯碌々トシテ光陰ヲ消過シテ可ナランヤ」と嘆じ、「嗚呼人生ハ絶望ノ人生ニアラサルナリ」と反転、「言ヲ寄ス、人間晏然康然、徒ニ眼前ノ行楽ニ耽リ、大名ヲ後世ニ残留スルヲ知ラス」して、「唯生レ、唯死シ、唯食ヒ、唯寐テ、行路ニ怒濤高瀾ナク、言ニ金石ノ語ナク、行ニ大義大勇大智ノ高節」なきを難じている。

この一文は、透谷前半の、「当世文学の潮模様」（明23・1）における、「嗚呼少年の才子よ、文学の真味茲にあらず、天下大に公等を待つ所あり、放縦に誤る勿れ望長き文豪よ君が世界は今代にあらずして未来の他の時代にあり、」とか、「嗚呼愛する者よ顧ふは余をして再び公等を歓楽者と呼ばしめなよ心あれや心ある者よ、天下は公等に頼りて救はれんとす」などの呼びかけや、更には、透谷の次のような言説を彷彿させるものがある。

嗚呼豈に然らんや、憤激して起つ可き社界は汝が眼前に横はらずや、区々恋愛の説明吾人是れに懶める事久し、些々たる一代の栄声を求めて咄々何の狭隘なる、汝が前に粉砕す可き悪組織の社界あらずや、

（「時勢に感あり」明23・3）

嗚呼外面に歓声を聞き裡面に血涙の滴るを見る、斯の如きは民を思ふの士の豈に能く憂悶するなきを得る所ならんや。太とき煙管を口にし、美くしき酒盃を手にするは学者か政治家か将た宗教家か、われ彼等に対して憮然たり。嗚呼泣かん乎笑はん乎、迷ふ事久し。われに命ずる者あり、曰く憂ひよ、憂ふる間に楽あらん。

（「泣かん乎笑はん乎」明23・4）

結局、透谷は、「人世ハ確実ナリ夢ニアラス」という、この第四のルートを走っていくことになる。

しかし、それは、一呼吸おいて、「自然は広漠たる大海にして人生は廷々たる浮島に似たり。」（「万物の声と詩人」明26・10）とか、「仰いで蒼穹を観れば、無数の星宿紛糾して我が頭にあり。顧みて我が五尺を視、更に又内観して我が内なるものを察するに、彼と我との距離甚だ遠きに驚ろく。不死不朽、彼と与にあり、衰老病死我と与にあり、鮮美透涼なる彼に対して、撓み易く折れ易き我れ如何に赧然たるべきぞ。」（「一夕観」明26・11）といった世界へと続いてゆくので、そこ

に一つの変成をみる。

五、

このT．K．氏が何者かは不明である。国木田哲夫のT．K．、徳冨健次郎のT．K．なども考えられる。しかし、T．K．氏は、この四論のみを提示して消えている。そして、その内容は、いかにも透谷に近い。このことは、二つの面が考えられる。一つは透谷が、必ずしも当代に抜きんでていたとは言えないということを物語るものかもしれないということであり、もう一つは、そういう中で精神の自律、自我の解放を高唱した、透谷の秀抜さを示すものであるかもしれないということである。

透谷は、結局、旅行者にも、平和運動家にも、翻訳家にもならなかった。もしそれらのどれかを選ぶかどれかに深くはいっていたら、また一つの可能性が開けていたかも知れない。しかし、透谷は第四「人生」的な内実の方向でその生を走った。山野を疾駆したトラーヴェラーの放恣が後期の透谷にあったら、西行の彷徨を試みたり、近代化の原景たる西欧を旅していたらと思うし、透谷に木下尚江や賀川豊彦的な運動の具体があったらとも思い、そしてもし「戦争と平和」の本格的な翻訳の試みがあったらなどと思うのは、一種のないものねだりの愚きわまるものであろう。しかし、四つの投稿論は「もう一つの透谷」の措定を許すものでもあった。

（まきばやし　こうじ、広島大学大学院教授）